

	静岡大学 農学分野
学部等の教育研究 組織の名称	農学部（第1年次:150 第3年次:10） 大学院農学研究科（M:87） 大学院自然科学系教育部（D:50）
沿 革	昭和22（1947）年 静岡県立静岡農林専門学校設置 昭和25（1950）年 静岡県立静岡農科大学設置 昭和26（1951）年 静岡大学農学部設置 昭和45（1970）年 大学院農学研究科修士課程設置 平成18（2006）年 大学院自然科学系教育部博士課程設置
設置目的等	<p>昭和22年、静岡県立静岡農科大学の前身である静岡県立静岡農林専門学校は、農業及び林業に関する高等の教育を施し農山村振興に役立つ科学的農業人を養成することを目的として設置された。</p> <p>昭和25年、農林業に関する学術及びその応用について教授研究し併せて産業の発展に貢献することを目的として、静岡県立静岡農科大学が設置された。</p> <p>昭和26年、静岡県立静岡農科大学は国立に移管され、静岡大学農学部が設置された。</p> <p>昭和45年、地域産業を背景とした特色ある教育研究を通じて精深な学識を修め、専門分野における理論と応用の研究能力を有し農林業の近代化と発展を推進しうる人材の養成を目的として、農学研究科修士課程が設置された。</p> <p>平成18年、時代に即応した幅広い素養と特化した専門知識及び国際性豊かな知識を有する先端技術者及び研究者の養成を目的として、電子科学研究科博士課程（後期3年のみの課程）及び理工学研究科博士後期課程を改組し、自然科学系教育部博士課程（後期3年のみの課程）が設置された。</p>
強みや特色、 社会的な役割	<p>静岡大学は、富士山から駿河湾に至る豊饒な風土を背景とする静岡県において、「農業生産技術の開発」、「生物機能の解明」、「森林を含む生物資源の利用」、「農林生態系と地域環境の保全」など、生物科学と環境科学を融合した農学を考究し、地域農林業と地域社会の発展を目指し教育、研究、社会貢献に取り組んでおり、以下の強み、特色、社会的な役割を有している。</p>

- バイオサイエンスと環境に関する先端的な専門教育やフィールドを用いた多様な実践教育を展開し、未来を拓くことのできる国際性とチャレンジ精神を併せ持つ高度な専門人材育成の役割を果たす。

バイオサイエンス，環境・エネルギーの専門領域に関する深い知識と時代に対応した幅広い素養を有し、地域社会や国際社会の期待に応えられる高度先端技術者及び研究者の人材育成の役割を充実する。

- 農場，演習林及び国内外の農村などを利用した農業実地体験型及び課題探求開発型フィールド教育、実用面を強く意識した専門教育、グローバル農学人材の育成などの特色ある教育を進めてきた実績を生かし、課題探求能力と国際性を有し、農学分野の各方面で活躍できる技術者を育成する学部・大学院教育を目指して不断の改善・充実を図る。

- 応用生物化学や植物科学をはじめとする高い研究実績と、地域農林業・地域産業のニーズに応えるための幅広い研究実績を生かし、地元産業界や国公立研究機関との共同研究や連携を推進し、我が国の農学及び関連産業の発展に寄与する。

- 農場・演習林が教育関係共同利用拠点に認定され、他大学や地域などとの連携と人材育成に寄与している。静岡県経済産業部や静岡市商工会議所などとの緊密な連携などを通して、地域社会に貢献してきた実績を生かし、静岡県をはじめとする周辺地域の農業・農村、関連産業の振興・発展に寄与する。

- 修士課程農業ビジネス起業人育成コースなどによる地域との連携・協力の実績を生かしながら、社会人教育を更に推進し、地域の農業や関連産業の活性化に寄与する。

- 高校生向け体験講座のニュートンチャレンジなどの実績を生かし、地域の高校生の理科教育に寄与する。

# ミッションの再定義(農学)

## 振興の観点

地域の農林水産業や関連産業の振興を牽引するとともに、人口増加に伴う世界的な食料や環境等の諸課題の解決への貢献の観点から、必要に応じて医学、工学、社会科学といった他の学問分野と連携した教育研究をより一層展開しつつ、産業界をはじめとする社会の要請に応えた高度な専門職業人や研究能力を有する人材育成の役割を一層果たしていくため、大学院を中心に教育研究組織の再編・整備や機能強化を図る。

## 各大学の特色・強みを活かした機能強化の例

- (例)
- 北海道大学** 持続的生産管理、人獣共通感染症をはじめ農学分野において国際的に高い評価
  - 帯広畜産大学** 獣医学、農畜産学、生殖生物学、原虫病学
  - 弘前大学** 未利用の地域資源の開発、リンゴ等の高品質化
  - 岩手大学** 寒冷条件下の生物環境適応メカニズムと山間地資源開発研究
  - 東北大学** 植物生産、動物生産、水産物生産など農学分野において国際的に高い評価
  - 山形大学** 山形県の在来作物の高度化利用
  - 茨城大学** 植物の病虫害防除、霞ヶ浦流域環境再生、再生可能エネルギーの開発
  - 筑波大学** 遺伝子組換え植物、重要園芸作物の次世代型生物資源開発・利活用に関する先導的研究
  - 宇都宮大学** 難防除雑草の制御、植物病虫害、野生動物
  - 千葉大学** 園芸植物の遺伝育種、植物工場等施設園芸、ランドスケープをはじめ農学分野において国際的に高い評価
  - 東京大学** 多数の国際共同研究等の展開、環境保全等農学分野において国際的に高い評価
  - 東京農工大学** イネ新品種開発、ゲノム情報解析をはじめ農学分野において国際的に高い評価
  - 東京海洋大学** 代理親魚による種苗生産技術、魚類のゲノム科学、海洋工学分野との連携による海洋環境学
  - 新潟大学** イネの育種、米の高度利用、超高压加工食品、災害食、トキを含む自然環境保全
  - 山梨大学** ワイン科学、微生物バイオテクノロジー、持続的食物生産、体細胞クローン技術等医工農連携
  - 信州大学** スパイダーシルク等の新バイオファイバー素材、山岳域研究
  - 岐阜大学** 生命科学、環境科学、糖鎖科学、野生動物管理学
  - 静岡大学** 応用生物化学、植物科学
  - 名古屋大学** 植物科学、ケミカルバイオロジー、動物内分泌学をはじめ農学分野において国際的に高い評価
  - 三重大学** アコヤガイの品種改良、天然リグニン誘導体の高級活用法の開発
  - 京都大学** 食料生産技術、生産環境保全、バイオマスの利活用等農学分野において国際的に高い評価

## 教育

- 生物資源を食品のみならず幅広く応用する、森林の持つ多面的な価値を考究する、といった観点など、近年の課題に対応した学科改組等を進め、広がりを持った教育研究に取り組んでいる。
- 農学・林学分野の国際的な技術者教育プログラムとしての認定を受ける大学や、ISOによる質の管理や、農業や食品産業に求められる国際的な管理システムであるGAP、HACCPなど国際性や質を意識した教育の取組が進展。

## 研究

- 地域の農産物や地域独特の環境(汽水、亜熱帯等)に関する研究等、特色ある取組や、機能性食品や植物工場などで医学、工学等との連携が進展。

## 産業振興・地域貢献

- 食品加工業を中心に、産業界との連携が行われているほか、都道府県の農業試験場との連携が進展。
- 大学院への社会人受入れのほか、農業の6次産業化等の新たなニーズに対応した社会人講座など、地域の学習ニーズに対応した取組を実施。
- JICA研修生の受入れや、途上国からの留学生を受入れ、諸外国に数多くのリーダー人材を輩出。

- 神戸大学** 家畜育種・繁殖学、植物科学、微生物学
- 鳥取大学** 乾燥地農学、鳥インフルエンザ防除対策、ナシ新品種の育成、きのこ遺伝資源の利活用
- 島根大学** 汽水域の生物資源の利活用、高齢化社会における豊かな農山村の創造に寄与する学際的研究
- 岡山大学** 植物遺伝資源・植物ストレス科学、生殖補助医療技術者の養成
- 広島大学** 動植物科学、水産海洋科学、食品科学
- 山口大学** 「中高温機能性」微生物開発、作物生産新技術開発、人獣共通感染症、獣医療の高度化
- 香川大学** 希少糖の開発利用、実用植物のゲノム・遺伝子源解析研究
- 愛媛大学** 生殖生理学を基盤とした養殖技術、製紙技術・機能紙の研究
- 高知大学** 魚毒病による食中毒リスクの評価法開発、農業地域における水管理・資源循環システムの構築、植物健康基礎医学
- 九州大学** ゲノム情報解析、食品の機能性、新育種法等農学分野において国際的に高い評価
- 佐賀大学** 遺伝資源(ミカン亜科植物・ダイズ突然変異系統)の保存とゲノム研究を基盤とした新品種開発等
- 長崎大学** 海洋生物の細胞生化学、低次生物生産の制御
- 宮崎大学** 産業動物生産と防疫、動植物の生理活性物質の探索と機能解析、農工・医獣医融合教育研究
- 鹿児島大学** 農畜水産物の安全安定供給、特殊土壌・災害からの国土保全、沿岸環境への負荷増大対策、獣医療の高度化
- 琉球大学** 熱帯・亜熱帯農学

※本資料は、各大学の強みや特色等の一部であり、これらを生かした人材育成や研究推進等の機能強化が考えられることを例として示したものである。詳細は各大学のミッション再定義に示されている。

※「QS World University Rankings (Agriculture & Forestry)」に基づき、「農学分野において国際的に高い評価」と表記したが、各大学では個々に世界的にインパクトの高い研究成果や地域特性に基づく実績を有している。

※赤字の大学は、博士の人材育成機能の役割が比較的高い大学(年間おおむね50名以上の学位を授与)を示す。(ただし、いずれの大学も学士、修士段階で輩出する学生が多数であり、これらの大学が博士の育成機能にのみ注力すべきことを示す意図ではない。)